

20代に見られる断定の助動詞「だ」を伴う文末表現の戦略的な使い方

—断定の助動詞「だ」の「断定性」と「男性性」を中心に—

金 秀 容*

A Study on the Strategic usage of Assertion Auxiliary Verb “da” as Sentence final markers which is found in People in their 20s’s

Focusing around the Assertion and Masculinity of the Assertion Auxiliary Verb “da”

KIM Soo-Yong

abstract

This study analyzed people in their 20s’s strategic usage of assertion auxiliary verb “da” as sentence final markers under the circumstance of expressing one’s opinion, from the aspect of masculinity and assertion. The focuses were speaker’s intensity, grammatical form and utterance function with “da” as sentence final markers. The survey materials were telephone conversations with close friends.

As a result of the analysis, people in their 20s’s tend to weaken the masculinity and assertion of “da” in the field of “grammatical form” and “utterance function” when they use assertion auxiliary verb “da” as sentence final markers. This trend was also found in using traditional masculine sentence final markers. Among others, the avoidance of the masculinity of “da” was found not only women but men. It shows that the traditional masculine image of “da” has been overaccentuated. This leads that, those speakers exercised one’s ingenuity in avoiding the exaggerated masculine image of assertion auxiliary verb “da” as sentence final markers. This study observed curious instances among those ingenuities. The most prominent one was “～ (n) darou (ne) form” as monology. In this survey, it has been almost immobilized among people. Another one was “～ (n) dayone form”. What is interesting about this was its character that can state one’s opinion without the masculine image of “da”.

Keywords : qualitative analysis, various usage , *da*-sentence final markers, assertion, masculinity

1 はじめに

日本語の文末表現は、話し手の性別が表れる言語項目の一つとしてよく知られている。文末表現の研究の多くは、その使用において男女差が少なくなっているという結論を出している。しかし、このような結論を導き出すにあたって、ほとんどの研究は、男女が使う文末表現の形式に注目している。男女の文末表現の使用状況をより明確に把握するためには、形式のみならず、「文末表現をどのように使っているのか」ということも観察する必要があるだろう。本研究は、このような立場から、男女の文末表現の使用状況を観察することにする。

キーワード：質的な分析、多様な使い方、ダ文末表現、断定性、男性性

* 平成17年度生 国際日本学専攻

2 先行研究と研究目的

2.1 文末表現と性差に関する研究

1999年～2008年までの10年間、現代語を中心に文末表現とその使い手の性別を関連させた論文は、筆者が調べた範囲内で、24件見つかった。使い手の属性と言葉を関連させる場合、話し言葉であれ書き言葉であれ、言葉が使用される文脈によって使い手は表現を使い分けるので、どのような資料を調査対象にするかはとても重要である。特に性別を扱う場合は、性別に関するステレオタイプが現在も大きな影響力を持つため、資料の選択に慎重さが問われる。そこで、ここでは、調査資料の性質によって先行研究をまとめる。具体的には、意図的な加工の少ない「実際の会話」を、研究において全資料として使っているか、一部の資料として使っているか、使っていないかによって、大きく三つに分けて記述していく。

まず、実際の会話のみを資料とした研究は、非常に少なく、管見によれば、小田（1999）、遠藤（2002a）、谷部（2006）の3件のみである。小田（1999）と遠藤（2002a）は男女による文末表現の差が少なくなったことを、谷部（2006）は若い女性が女性専用の表現として知られている「わ」をイントネーションや音調を変えて使用し、従来のような女性性を表すための使用よりは、より多様な使い方をしていることを報告している。

次に、実際の会話を資料の一部として扱った研究は6件見つかった。主に、実際の会話とドラマ・辞書を比較するか、実際の会話とアンケート調査から得られた被験者らの意識を比較している。その研究としては水本（2006）などがあり、水本（2006）は実際の会話とテレビドラマを比較している。それを含めたこの分野における主な結論は、実際の会話では、ドラマや辞書、アンケート調査の結果ほど、従来からの女性形文末表現・男性形文末表現が現れていないということであった。

最後に、実際の会話以外の資料を扱っている研究は、最も多く、15件見つかった。この場合、資料としては、文学作品・ドラマシナリオ・新聞記事・教科書・辞書・アンケート調査の結果などを使っている。これらの資料には筆者や作成者の意図が多く表れており、人工性が多く加えられた資料だといえる。これらの論文は、その内容によって、「文末表現の使用」・「文末表現の分類」・「文末表現の動態的变化」・「文末表現に対する意識」に分けられる。「文末表現の使用」に関する論文が最も多いが、この関心においては二種類の対照的な報告がある。杉山（1999）などのように、文学作品の中では女性専用文末表現・男性専用文末表現が依然としてよく使われているという報告と、深尾（2004）などのように、小説とドラマシナリオにおいて文末表現の男女差は少なく多様な使い方が見られるという報告がある。研究者の観点によって結果は異なってくるが、これらの対照的な結果から、人工的要素の多い資料における文末表現の現状として、顕著な性差と中性化の両面が見受けられる。「文末表現の分類」に関する論文には、中村（2000）があるが、この論文では辞書と著者の言語的直感を参考に、終助詞を女性語・男性語・汎性語に分類している。ここでは、「～だね」と「～だよ」を男女ともに使用する分類に入れており、従来の分類とは異なり、文末表現の中性化も念頭に入れて分類していることが分かる。「文末表現の動態的变化」に関する論文としては、遠藤（2002b）などがあり、戦時中の文末表現と比べて、現代語の文末表現には性差が少ないことが述べられている。「文末表現に対する意識」に関する論文としては有泉（2007）がある。この論文は、話者が使う文末表現（女性形・男性形・中性形）が、その話者の印象にどのような影響を及ぼすのかを、社会心理学の観点から分析したものである。その結果としては、依然として、女性形文末表現・男性形文末表現には、男女に対する従来からの固定観念が含まれていることが報告されている。つまり、意識の中では、文末表現の性差が明確に存在しているということを意味する。以上、人工的要素の多い資料を扱った論文をまとめた。この分野では、依然として文末表現の性差を指摘する論文もあるが、全体的には文末表現の性差が少なくなっていくことを述べる論文がより多く現われている。

以上、1999年から10年間の先行研究をまとめた。調査資料の質によって、結果は少し異なっても、全体的に文末表現の性差は少なくなっていること、つまり、多様になっていることを述べていることが分かる。このような文末表現の多様性を言及している論文は、全24件の論文の内17件あったが、その中で、水本（2006）などの13件が量的分析を行っていた。分析方法と調査資料を合わせて考えると、先行研究では人工的要素の多い資料を

扱った量的分析が主に行われていたことが分かる。つまり、人工的要素があまり加えられていない自然談話を資料とした、文末表現の個別の使い分けに関する研究はあまり行われていない。このような理由から、本研究では、実際の会話を調査資料とした質的な分析を行い、男女による文末表現の多様な使用を把握する。

2.2 断定の助動詞「だ」を伴う文末表現と性差に関する研究

より体系的な分析を行うためには、一度に全ての文末表現を扱うよりも、限られた範囲の表現を、一つずつ扱うことが、一層、効果的であろう。従って、その一步として、本研究では、助動詞「だ」に焦点を当てることにする。「だ」は、森田(2007:147)によると「断定の性格」を持つ助動詞である。また、日本語記述文法研究会(2003:4-7)では、日本語のモダリティを「文の伝達的な表し分けを表すモダリティ」・「事態に対するとらえ方を表すモダリティ」・「先行文脈と文の関係づけを表すモダリティ」・「聞き手に対する伝え方を表すモダリティ」など大きく4つのタイプに分けている。断定の助動詞「だ」は、「事態に対するとらえ方を表すモダリティ」の下位分類である「断定」のモダリティのみならず、「文の伝達的な表し分けを表すモダリティ」・「先行文脈と文の関係づけを表すモダリティ」にも現れており、使われ方によって様々なモダリティを持っていることが分かる。

断定の助動詞「だ」が使い手の性別と関連される場合、上述したような「だ」の様々なモダリティ属性はあまり考慮されていない。有泉(2007:6)と中村(2000:6-8)と金水(2003:135)などでは、文末表現としての「だ い?」・「だ(な/よ/ね/よね/ぜ/ぞ/とも/わ↓)」・「んだ(よ)」・「だろう(な)」・「なんだ」を男性的な表現と分類している。水本(2006:57)は、女性的な表現かそうではないかを、断定の助動詞「だ」の有無によって分類しており、断定の助動詞「だ」の不使用を女性的な表現としている。これらの研究は、男性的な表現の判断基準として、文脈より文法形態を中心に行っている。また、金水(2003:137)は「～だわ」や「あらいやだ」などの独り言を除外した断定の助動詞「だ」を「男性専用表現」の特徴の一つとして挙げており、杉山(1999:50)も断定の助動詞「だ」を男性的表現形式として扱っている。以上のことから断定の助動詞「だ」を使用した表現には、男性的な表現の要素があることが確かめられる。

本研究では、以上のような断定の助動詞「だ」を伴う文末表現をもとに、話者の意志が強く表れている、すなわち、断定の助動詞「だ」が多く現れるとみられる「主張の場面」において、使い手は「だ」を伴う文末表現をどのように扱っているのかを調べる。ここで、上述した「だ」が持つ機能である「断定の性格」と「男性的な表現の要素」を定義する。まず、「だ」が持つ「断定の性格」は、森田(2007:147)に従い、「叙述の内容に対してそれが間違いなくそうであると判断を下し、全体を一つの文としてまとめて言い切る働き」とする。これを本研究では「だ」の「断定性」と呼ぶことにする。「だ」が持つ「男性的な表現の要素」については、本研究と同様の場面を扱っている鈴木(1997)の研究を参考にする。鈴木(1997:66-67)によると、男性形表現としての「だ」は、「自分の主張を言い切り、相手に対する優位性を示す」効果があると述べている。これを本研究では「だ」の「男性性」と呼ぶことにする。また、ブラウンとレビンソンによって提唱された「ポライトネス理論」からヒントを得て、使い手による戦略的な使い方に注目する。宇佐美(2002:6-7)によると、この理論の主張は、人々はコミュニケーションをするとき、円滑な人間関係を保つために、基本的な欲求を脅かさないように配慮し、様々な言語戦略を使うという。本研究では、この理論の詳細な内容を分析に適用するのではなく、人はコミュニケーションをするとき、相手との関係を意識して能動的に言葉を使うという、基本的な立場のみ参考にする。

このような立場から、本研究では、20代の方は、話者の意志が強く表れていると考えられる「主張の場面」において、断定の助動詞「だ」を伴う文末表現をどのように戦略的に使っているのかを、「だ」の持つ「断定性」と「男性性」を中心に観察する。

3 分析資料と研究方法

3.1 分析資料

親しい友人同士の電話の会話を資料とする。電話の会話を資料としたのは、視線などの非言語行動を除外す

るためである。対象は、全国共通話者¹である20代男女である。2010年6月に、20代女性4名に調査を依頼し、同性の友人・異性の友人との電話の会話を、それぞれ20分間ずつ録音してもらった。相手側にも録音の許可をもらい実行した。会話のテーマを指定し、これに対してお互いの主張を自由に話してもらった。テーマは「男女の違いと、男女ともに相手に対して理解できない点」である。録音方法は、できるだけ自然な環境での会話を収集するため、4名の協力者に録音機を渡し、録音をしてもらい、後から受け取る形をとった。収集した8組の会話を全て文字化²し、分析資料とした。会話資料の詳細内容は以下の〈表1〉にまとめた。会話者の表記は、名前のイニシャルをアルファベット大文字で表記し、性別（女性は「f」、男性は「m」）はアルファベット小文字で表記し、これらを組み合わせた。

〈表1〉 会話者と会話時間

協力者（会話者）		相手（会話者）	会話時間
Sf (20才 学生)	⇔	Tf (22才 学生)	20分
	⇔	Nm (20才 学生)	20分
Kf (23才 学生)	⇔	Af (23才 会社員)	20分
	⇔	Sm (22才 学生)	20分
If (28才 会社員)	⇔	Mf (28才 会社員)	20分
	⇔	Mm (28才 会社員)	20分
Df (20才 学生)	⇔	O f (20才 学生)	20分
	⇔	Ym (23才 学生)	20分

3.2 研究方法

文字化された会話の中から、比較的、強い主張が表れていると思われる「相手と異なる意見を持つことを主張している場面」を選んだ。場面の抽出においては、相手と異なる意見を述べ始める発話からその話題が終わる発話までを一つの場面とした。このような場面は、Sfが参加している会話では13件（SfとTfの会話で8件、SfとNmの会話で5件）、Kfが参加している会話では17件（KfとAfの会話で6件、KfとSmの会話で11件）、Ifが参加している会話では16件（IfとMfの会話で9件、IfとMmの会話で7件）、Dfが参加している会話では5件（DfとOfの会話で2件、DfとYmの会話で3件）、合計51件の場面が得られた。

51件の場面それぞれにおいて、相手と異なる意見を述べ始める話者の発話のみ対象にし、該当話者の全発話を分析対象とした。資料を基に、まず、話者の主張の流れから「話者の主張度」を分類し、該当会話の中で用いられている「だ」を含む文末表現³（以下、「ダ文末表現」とする）の「文法形態」と「発話機能」を調べる。つまり、本研究は「話者の主張度」・「ダ文末表現」の「文法形態」・「ダ文末表現」の「発話機能」という、3つの観点から分析を行う。

「話者の主張度」は、主張の強い順に「意見主張」・「意見保留」・「意見放棄」と分類した。話し手が相手と異なる意見を主張している場合が「意見主張」、相手の意見に同意もせず意見主張もしない場合が「意見保留」、自分の意見を捨てるか相手の意見に同意する場合が「意見放棄」である。この主張度に関わる三つの段階に現れた「ダ文末表現」の「文法形態」の分類は、〈表2〉に示した。まず、文の終了の有無によって「終了形」と「非終了形」に分類し、その後「ダ文末表現」がどのような形で終わっているかを見て、中心的な働きをしている形をもとに再び分類した。先行研究において一度でも男性形とされている形態には囲み線を入れた。

主張度に関わる三つの段階に表れた「ダ文末表現」の「発話機能」は、〈表3〉に示した。会話の中で「ダ文末表現」がどのように機能しているかを、該当される会話全体の流れから把握するものである。「単純記述」は相手がどのような意見を持っているかをあまり意識せず自分の意見を語る機能、「感嘆」は感動を表す機能、「自問」は独り言のような機能、「強調」は発話内容を目立たせる機能、「断定」は断定の助動詞「だ」の文法的性格を生かした機能で、相手に向かって自分の意見を言い切る機能、「確認」は相手の話しを再び確かめる機能、「呼びかけ」は相手の注意を引く機能である。〈表3〉の中で、「該当会話」にある会話番号は「4 分析と考察」の中で提示されている会話番号と同様である。

〈表2〉「ダ文末表現」の文法形態 * 複数の類似した形態は中心形態以外を () の中に表記

文の終了の有無	分類	出現した形態
終了形	終止形	～(ん)だ
	過去形	～だった(な/のね)
	推量形	～(ん)だろう(ね)
	終助詞形	～(ん)だよ、～(ん)だよね、～(ん)だね、～(ん)だな、 ～んだもんね、～だっけ
	「と思う」形	～(ん)だと思う
非終了形	「し」形	～(ん)だし
	「けど」形	～(ん)だけど(ね/さ)、～んだけれど、～んだろうけど
	「から」形	～だから(さ)
	「と」形	～だなと

〈表3〉「ダ文末表現」の発話機能 * ゴシック文字の太字は該当の「ダ文末表現」

分類	該当会話	例
単純記述	〈会話1〉	((人名 Sm)) ちゃんそれに懲りた んだもんね hhh =
感嘆	〈会話2〉	実に素直 だな と
自問	〈会話2〉	なん だろう
強調	〈会話3〉	[大人だ：分かてる {hhhhhh .h} そう なんだ けど
断定	〈会話4〉	[あ 男子 も嫌 だよ
確認	〈会話5〉	(1) 勉強 h し h に h 行く んだ よね? それで
呼びかけ	〈会話7〉	でもさ：あれ だよ ね↑

以上の三つの分析観点に基づき、「ダ文末表現」がどのように使われているかを、話者の意見の主張が表れているか表れていないかに、大きく分けて、述べていくことにする。

4 分析と考察

分析の結果、主張度に関わる三つの段階において、「ダ文末表現」が全部で163例、見られた。「意見主張」で147例、「意見保留」で6例、「意見放棄」で10例が現れた。その詳細について、まず、出現数の少ない「意見保留」と「意見放棄」をまとめて先に述べることにする。

4.1 話者の意見主張が表れてない場合

ここでは、比較的、話し手の主張度が弱い「意見保留」(6例)と「意見放棄」(10例)についてまとめる。話し手や話し相手の性別による差は見られないので、全体傾向としてまとめる。

現れた「ダ文末表現」は、「単純記述」・「感嘆」としての「～んだ」、「自問」としての「～だろう」、「断定」としての「～だよ」・「～だよね」、「単純記述」・「断定」としての「～だね」、「単純記述」としての「～んだもんね」・「～だし」である。

男性形(「～んだ」・「～だろう」・「～だよ」・「～だよね」「～だね」)を基に、自分の意見を発話の最後まで明確な形にする「終了形」が主に使われているものの、ここでは「だ」の「男性性」を見ることはできない。その理由は主張の弱さである。表れた発話機能である「単純記述」・「感嘆」・「自問」は、相手に向かって自分の主張を言い切る機能ではない。この三つの発話機能は、「だ」の文法的性格である「断定性」も弱めた使い方であると思われる。その一例として「単純記述」の「～んだもんね」を〈会話1〉に示す。一方、「断定」の機能として使われた場合においても、場面の性格上、冗談の中での断定や相手への協調を表すための断定であり、「だ」の「男性性」は見られない。その一例として「～だよね」を、同様に〈会話1〉に示す。該当する発話は「→」で、

該当する「ダ文末表現」はゴシック文字の太字で示した。

>

〈会話1〉(KfはSmの意見に同意する。)

Sm あんま：しつこくやられるとやっぱさ：＝

Kf う：ん

→ Kf そうだよね：{°う：：ん°}((人名 Sm)) ちゃんそれに懲りた**んだもんね** hhh＝

4.2 話者の意見主張が表れている場合

比較的、話し手の主張度が強い「意見主張」(147例)についてまとめる。ここでは、「だ」の「男性性」が表れていないか、表れているか、中和されているかによって、「ダ文末表現」の文法形態を分類し、説明する。

4.2.1 「男性性」が見られない「ダ文末表現」の文法形態

話し手や相手の性別による差は見られなかった。全部で110例の「ダ文末表現」が見られた。ここでは発話機能「断定」の出現の有無に分けて説明する。

発話機能として「断定」が見られない「ダ文末表現」の文法形態は、「単純記述」としての「～だった(な／のね)」、「自問」としての「～(ん)だろう(ね)」・「～だっけ」、「感嘆」としての「～(ん)だね」、「単純記述」・「感嘆」・「強調」としての「非終了形(「～んだけど」以外)」である。「単純記述」・「自問」・「感嘆」は、前節で述べたように「だ」の「断定性」を弱める使い方である。その例として「自問」と「感嘆」を〈会話2〉に示す。特に「自問」の機能を持つ「推量形(「～(ん)だろう(ね)」)」は、NmとKfによってそれぞれ全46例の内13例ずつ見られ、多用されていた。該当の会話を見ると、〈会話2〉のように発話を続ける中で意見を整えるために使っている。このことから、「推量形」の「ダ文末表現」は、その断定性がほぼ失われ、まるで間投助詞のように使われる傾向があることが分かる。

〈会話2〉(Nmは男女の違いを語っている。)

自問 → Nm なんだろう

Nm (1) う：んたん# -

Nm 女子のほうが短絡というか：

Sf う：ん

感嘆 → Nm 実に素直だなど

「強調」の機能として使われる場合は、自分の意見を最後まで主張し切らない非終了の形態をしており、その形態自体が「だ」の「断定性」を弱めている。その一例を「～んだけど」と共に〈会話3〉に示す。

〈会話3〉(Sfは友達の大切さを語る Tfに同意しながらも、彼氏の必要性も訴えている。)

Tf [そんなね友達ぐらいの距離が「一番いいのよ」とかって思ってる勝手に
[わ###

→ Sf [大人だ：分かってる {hhhhhh .h} そう**んだけど**そうんだけどねでもなうん
あ：：あ：： {hhhh} あ：： {ううん}

発話機能として「断定」が見られる「ダ文末表現」の文法形態は、「単純記述」・「感嘆」・「断定」としての「～(ん)だね」、「単純記述」・「断定」としての「～(ん)だと思う」、「単純記述」・「強調」・「断定」としての「～んだけど」である。ここでは、上述されてない「断定」の機能を述べる。まず、これらの表現はその形態から「だ」の「断定性」が薄れていることが分かる。「～んだけど」と「～(ん)だと思う」の場合は、一種の婉曲法としての「非終了形」と「と思う」が「だ」の「断定性」を弱める。「～(ん)だね」の場合は、先行研究では男性形と分類されているが、終助詞「ね」が「だ」の「断定性」を弱めるとされる。メイナード(1994：109)は、会話

の中で、「よ」には情報中心の機能が、「ね」には相手中心の機能があると報告している。つまり、相手との共感を表す「ね」が「だ」の「断定性」を弱化させるのである。

4.2.2 「男性性」が見られる「ダ文末表現」の文法形態

全部で23例の「ダ文末表現」が見られた。「単純記述」・「感嘆」・「自問」・「断定」としての「～（ん）だ」、
「単純記述」・「断定」としての「～（ん）だよ」が現れた。以下では、「断定」機能に関して述べていく。

「断定」機能として使われる場合は、「だ」の「男性性」が見られる場合と見られない場合に分けられる。「だ」の「男性性」が見られる場合は全部で5例（男性に1例、女性に4例）あった。女性の場合は、SfとKfが男友達と話す時に使っている。その一例が〈会話4〉である。

〈会話4〉（バイト先でのいじめに関して話している。SfはNmの話の間違いを指摘する。）

→ Sf [あ男子も嫌いだよ
Nm あ男子も？ =
Sf =うん[嫌い

ここで、Dfの「ダ文末表現」の使い方に触れ、女性の「ダ文末表現」の使い方をまとめる。Dfは「男性性」が見られる「ダ文末表現」は使っていないが、相手が女性の場合は「意見保留」において1例の「ダ文末表現」しか現れていない反面、相手が男性の場合は「意見主張」において9例の「ダ文末表現」が現れている。これらを総合的に考えると、用例は少ないけれども、20代女性は男友達よりは女友達と話す時に、「だ」の「男性性」に注意した使い方をしているようにも考えられる。一方、「だ」の「男性性」が見られない場合は、話し相手の性別に応じた使い分けは現れていない。主に引用形式や自問形式で使われるか、冗談を言う場面や相手を褒める場面で使われており、ここに相手に優位性を示すような「だ」の「男性性」は見られない。

4.2.3 「男性性」が中和された「ダ文末表現」の文法形態

全部で14例である。現れた「ダ文末表現」は、「単純記述」・「断定」・「確認」・「呼びかけ」としての「～（ん）だよね」のみである。上述したように、「単純記述」と終助詞「ね」に中心を置く「確認」は、「だ」の「断定性」を弱める。その例として「確認」を〈会話5〉に示す。

〈会話5〉（YmはDfがバイト先で聞いた話を確認している。）

→ Ym (1) 勉強 h し h に h 行くんだよね？ それで
Df そう

ここからは「断定」と「呼びかけ」に関して述べる。「断定」機能として使われる場合は、全部で4例が現れており、その内の3例は、女性（Kf）が男友達に対して使っていた。全てが〈会話6〉のように、文法形態に相手との共感を表す「ね」はあるものの、相手との共感よりは自分の主張に中心を置いている。しかし、主張を述べていても「～（ん）だ」と「～（ん）だよ」を使った主張ほど、相手に向かって自分の意見を押し付けていない。つまり、「だ」の「男性性」はそれほど見受けられない。このように考えると、「～（ん）だよね」は断定の助動詞「だ」と情報中心の終助詞「よ」と相手中心の終助詞「ね」がバランスよく調和された結果、「だ」の「男性性」を気にせず、意見主張場面において負担なく使える形態になったとも考えられる。また、Kfは話し相手が女友達の場合は、「～（ん）だよね」のイントネーションを上げて使い、〈会話7〉のように「呼びかけ」の機能として使っていた。これは終助詞「ね」を強調し、「だ」の「断定性」を弱める使い方であり、ここからも女性は女友達に対して「だ」の「男性性」を弱めた発話をしていることが再び見られる。

(会話6) (Kfは彼氏といつも一緒にいられない理由を述べている。)

Kf 女の子に求めて女友達に求めてるものと：

Sm う：ん =

Kf = 男友達に求めてるものが違うのと同じで：

→ Kf {う：ん} やっぱり一緒にいるときのそ感覚っていうのは全然違うんだよね：

(会話7) (女性のほうが冷静であるというAfの意見に、Kfは反対の意見を出している。)

Af だから結構冷めてるっていうか冷静に？

Kf うんうんうん

Af (1) なんか物事を言えるらしいよ↑

Kf へ：：：：：

Af う：ん

→ Kf でもさ： あれだよね↑ {うん} なんかこう感情的に女の人のほうがなりやすいじゃん？

今までの分析から、20代の男女は、「ダ文末表現」を用いて自分の意見を主張するとき、全体的に断定の助動詞「だ」の「男性性」のみならず、「断定性」も弱める傾向が強いことが分かった。男性形文末表現も含み、表れた「ダ文末表現」のほとんどは、発話機能の面において、「単純記述」・「感嘆」・「自問」・「確認」・「呼びかけ」の機能として用いられ、「だ」の「断定性」を弱められて使用される傾向にあった。「断定」の機能が見られる場合は、「～(ん)だね」・「[～と思う]形」・「非終了形」・「～(ん)だよね」のような文法形態を使うことによって「だ」の「断定性」と「男性性」が弱められていた。「だ」の「男性性」は、「～(ん)だ」と「～(ん)だよ」の形態から5例しか現れなかったが、ほとんどは女性が男友達に話すときであった。

5 まとめと結論

本研究では、20代の男女が断定の助動詞「だ」を含む文末表現をどのように扱っているのかを、「だ」の「断定性」と「男性性」を中心に述べてきた。その結果を、以下のようにまとめる。

- 1) 全体的に、20代の男女は、くだけた言い方ができるほどの親しい関係の人に対して、断定の助動詞「だ」を含む文末表現を用いて、強い主張はあまり行わないことが分かった。意見の主張が表れる場合は、断定の助動詞「だ」の「男性性」のみならず「断定性」まで弱める使い方をしてきた。特に、「だ」の「男性性」は、「断定」機能として使われる「～(ん)だ」と「～(ん)だよ」という、非常に限られた使い方しか現れず、会話者らは男女ともに使用を極端に避けていた。「だ」の「断定性」と「男性性」を弱める方法としては、文法形態においては相手との共感を表す「ね」を加えるか、一種の婉曲法である「[～と思う]形」と「非終了形」を加える、発話機能においては「単純記述」・「感嘆」・「自問」・「確認」・「呼びかけ」の機能として「だ」を使用する、などがあった。これらの弱化させる方法を二重三重に重ねて使う場合もあった。
- 2) 「だ」の「男性性」を避ける傾向は、比較的、女性が女友達と話す時に表れていた。
- 3) 1)のように「だ」の「断定性」と「男性性」を弱める傾向は、従来から男性形文末表現と言われてきた「～(ん)だ(よ/よね/ね/な)」, 「～(ん)だろう(ね)」にも同様に見られた。この内、「自問」の「～(ん)だろう(ね)」はほぼ固定された使い方だと思われる。また、意見を主張する際、「～(ん)だよね」を用いて、「だ」の「男性性」を気にせず、断定的な主張が述べられることも分かった。

以上のことから、20代の人々は男女を問わず、親しい仲間に対して、断定の助動詞「だ」を伴う文末表現を用いて異なる意見を述べる時、相手に優位性を示すような男性的な言い方は無論のこと、断定的に言い切った言い方も、ほとんどしないことが分かった。ここから、親しい関係においても、相手と異なる意見を述べる場面では、

「だ」の「断定性」と「男性性」に気を付けているように思われる。特に、「だ」を用いた男性的な言い方は、女性のみならず男性も極端に避けており、ここから、「だ」が持つ「男性性」を考えると、過剰に作られた非現実的な「男性性」のように思われる。このような「男性性」のイメージのため、女性同士の会話では「だ」を用いた男性的な言い方がより表れなかったと考えられる。より全体的な傾向としては、20代の方は、過剰な「男性性」を避けるため、従来からの男性形文末表現である「～(ん)だ(よ/よね/ね/な)」・「～(ん)だろう(ね)」に、「文法形態」と「発話機能」などにおいて様々な工夫を加えながら、より現実的な使い方をしていたと思われる。その工夫の中で、独り言の機能として使われた「～(ん)だろう(ね)」のようにほぼ固定された使い方や、「～(ん)だよね」を用いて「だ」の「男性性」を伴わず気楽に主張ができる興味深い使い方などが現れるようになったと考えられる。

注

- その条件は、海外や他地域での長期滞在の経験がなく、東京都・埼玉県・神奈川県・千葉県で生まれ育ち、本人に全国共通語を使っている意識がある人である。
- 文字化に使用した記号の意味は以下のとおりである。

〔 は 発話の重複	(数字) は 沈黙の秒数	hと.hは 笑い
文字は 強調されている発話	— は 音声の中断	? は 疑問か確認
↑ は 上昇イントネーション	° ° は 弱められている発話	{ } は 相手のあいづち
# は 聞き取り不能の部分	(()) は 転記者による注釈	: は 長音
= は その前後に感知可能な間が存在しない		[] は 引用部分
- 会話における文の定義に関しては、メイナード(1994:98)を参考にし、用言を含むか、文末イントネーションを伴うかの二点を主な判断基準とした。

参考文献

- 有泉優里(2007)「文末形式のジェンダーが話者についての印象に及ぼす影響」『社会言語科学』9-2 社会言語科学会 pp.3-16
- 宇佐美まゆみ(2002)「ポライトネス理論と対人コミュニケーション研究」『日本語教育通信』42 国際交流基金 pp.6-7
- 遠藤織枝(2002a)「男性のことばの文末」『男性のことば・職場編』ひつじ書房 pp.33-45
- 遠藤織枝(2002b)「戦時中ラジオドラマ台本にみる話し言葉の性差」『早稲田日本語研究』10 早稲田大学 pp.47-64
- 小田三千子(1999)「敬語と文末表現にみる若い女性のことばの変容」『ことば』20号 現代日本語研究会 pp.191-194
- 金水 敏(2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 杉山純子(1999)「インフォーマルな会話の文末表現に表れる女性語・男性語をめぐる作家の個性」『岐阜大学留学生センター紀要』2 岐阜大学 pp.48-57
- 鈴木 睦(1997)「女性語の本質—丁寧さ、発話行為の視点から」『女性語の世界』明治書院
- 泉子・K・メイナード(1994)『会話分析』くろしお出版
- 谷部弘子(2006)「『女性のことば・職場編』に見る終助詞「わ」の行方」『日本語教育』130 日本語教育学会 pp.60-69
- 日本語記述文法研究会編(2003)『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』くろしお出版
- 中村純子(2000)「終助詞における男性語と女性語」『信州大学留学生センター紀要』1 pp.1-11
- 深尾まどか(2004)「終助詞の男女による使い分け」『日本語教育研究』47 言語文化研究所 pp.43-68
- 水本光美・福盛寿賀子・福田あゆみ・高田恭子(2006)「ドラマに見る女ことば「女性文末詞」—実際の会話と比較して」『北九州市立大学国際論集』4 北九州市立大学 pp.51-70
- 森田良行(2007)『助詞・助動詞の辞典』東京堂出版